

ひる  
午 (散文詩)

居間に座って本を読んでいた僕が目上げたとき、既に雨は止んでいた。灰色の雲が低く迫り、空などというものはまるで無いようだ。静かだ。何でも無い。何にも無い。灰色の天井はゆっくりと動く。

正面のガラスと僕との間には、ストーヴから立ち昇るゆらゆら揺れる暖気がある。だから灰色に沈む風景もゆらゆら揺れる。ゆらゆらゆらゆら、僕の中でも何かが揺れる。古くさい感傷だ。僕の中には、いつも必ずこの古くさい感傷が居る。外は何も無い。何でも無い。

ガラスの向こうには、一本の細長い木がある。その向こうの画面を、二つの家が半分ずつ切っている。細長い木は、時々ゆらゆら揺れている。揺れる度に、私の中で何かが圧迫される。リズムとも言えぬ棒の如きリズム。低く一定の音で響くコントラバス。何でも無い時。しかし、‘叫び’を思わせる歪んだ空間。

何かが私を揺すぶる。何だろう。どうやら、哀しみにうちひしがれた女が、突然私の肩を揺すっている。私は途方にくれて、揺すられている。何もしてやれない。まるで麻薬のように甘美なこの時。つまり、何でも無い時。

こんな時を、お前も時折過ごしているだろう。こんな時は何も判然としたものはない。ただ日々経験している、また、経験した具体的な感情 毎日上司に怒鳴られ

てシュンとしてしまったこと、思いもかけず他人に頼られて感激したこと、ある人の力強い主張に自分の無力を感じたこと等の、形象を持った具体的な感情が、その形象を失い、ただ熾火のような‘哀しさ’‘けだるさ’‘喜び’という感情のみが、ぼりぼつりと浮んでくる。いくら鋭いカミソリで切ったとて、ただ空を切るばかりで何も見出せない 　　そういうものとしての感情。何でも無いもの。何にも無い空間。何でも無い時。

(1981.春)